

小学校、中学校における書く力の再考（第2年次）

— 他教科や生活への活用を目指して —

研究代表 東京学芸大学国語教育講座 大 熊 徹
附属小金井小学校 細 川 太 輔

目 次

1. はじめに（附属小金井小 細川太輔）	2
1. 1. 研究目的	2
1. 2. 研究の進め方	2
2. 研究の方向性（附属小金井小 細川太輔）	2
2. 1. 生活に生きる書く力とは	2
2. 1. 1. 書く意欲・習慣を育てる	3
2. 1. 2. 思考力・認識力・判断力を育てる	3
2. 2. 生活に生きる書く力を育てるために	3
2. 2. 1. 子どもの思いを大切にする	3
2. 2. 2. 教師の願いを大切にする	3
3. 検証授業（附属小金井中 石井健介）	3
3. 1. 検証授業の構想	3
3. 2. 単元に対する考え方	3
3. 3. 単元の目標	5
3. 4. 単元の評価規準	5
3. 5. 研究の視点	5
3. 5. 1. 視点1 小学校の学習との連携と発展	5
3. 5. 2. 視点2 相互交流による学習の深まり	5
3. 5. 3. 視点3 言語事項の学習との連携	5
3. 6. 学習指導計画	5
3. 7. 本時の展開	6
3. 7. 1. 本時の目標	6
3. 7. 2. 本時の展開	6
3. 7. 3. 本時の評価	6
3. 8. 生徒の作品と感想	8
4. 今年度の成果と課題（東京学芸大学 大熊徹）	9
4. 1. 成果	9
4. 2. 課題	9

東京学芸大学附属学校 研究紀要 第40集

小学校、中学校における書く力の再考（第2年次）

— 他教科や生活への活用を目指して —

研究代表 東京学芸大学国語教育講座 大熊 徹 附属小金井小学校 細川 太輔

研究同人 大熊徹・千田洋幸・中村和弘・廣川加代子（東京学芸大学）／木下ひさし（宮城教育大）／笠井正信（中央大学）／上田真也・古谷理恵（附属竹早小）／井上陽童・福田淳佑（附属世田谷小）／青山尚司・小倉勝登・大塚健太郎・成家雅史・細川太輔・三浦尚介・吉永安里（附属小金井小）／宮寄佐智子・岩浅健介（附属大泉小）／森頭子（附属竹早中）／渡邊裕（附属世田谷中）／石井健介・田中成行・松原洋子（附属小金井中）／荻野聡（附属国際中等）／片山守道（お茶の水女子大附属小）／奥村千絵（横浜国立大学附属横浜小）／浅見優子・油史枝・生島靖裕・伊澤圭花・石川尚樹・薄井智美・笥理紗子・川畑秀成・窪田雅美・小林真理子・坂本喜代子・三枝美枝・高桑美幸・高瀬誠哉・武井二郎・藤村由紀子・松江宣彦・松村優子・矢作朋子（東京都教員）／金野泰久（埼玉県教員）／小山進治（横浜市教員）／小川明夫（神奈川県養護学校教員）／大川修一（千葉県教員）／新井孝昇（愛知県教員）／赤井聡子・梅田芳樹・星野真奈美・諸戸香織・佐藤恵子・山本大輝（私立小学校教員）／高橋麻樹子（私立中学校教員）／南館伸介（教育出版）

1. はじめに

1. 1. 研究目的

小学校学習指導要領第1章総説に「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するように配慮しなければならない。」とある。つまり、言語活動を充実させ、思考力、判断力、表現力をはぐくむことが今求められている。

ここでは特にその言語活動の中で、書く力に焦点をあてる。書く力は表現する力、論理的思考力として、国語科だけでなく、他教科や日常生活に活用される力としてとても重要な力である。しかし学生から書くことの指導を卒業論文まできちんと受けてこなかったという声を多く聞く。もう一度基礎に立ち返り、小学校・中学校で必要な書く力、書くために必要な力は何かを検討することが急務であると考えている。真に必要な書く力を再定義し、そのための授業づくりを行い、提案していくことを目的としている。

1. 2. 研究の進め方

第1年次には小学校・中学校において必要な書く力を探るため教師の意識調査を行う。また先行研究から必要な書く力を育てる指導を定め、検証授業を行った。本年度、第2年次は言語技術だけではなく、他教科や生活へ活用される力が身につく実践を検討し、幅広く実践する。第3年次 求められる書く力や授業実践を冊子にまとめて発表し外部評価を受けることを考えている。

2. 研究の方向性

2. 1. 生活に生きる書く力とは

生活に生きる書く力を本稿では2つの方向性でとらえる。

2. 1. 1. 書く意欲・習慣を育てる

書く技能を身につけても、書く意欲をなくしたり、書く習慣が身に付かなかつたりすれば、その力を実生活で生かすことはできない。書く意欲・習慣を子どもの中に育てていくことをねらう。

2. 1. 2. 思考力・認識力・判断力を育てる

言葉の使い方だけ学習しても、それが表面上の言葉だけであったり、書き方だけであったりすればそれは実生活で生かすことができる力にはならない。相手や場、目的に応じて書いていくことで、書くことの深層の力が身につくと考え

2. 2. 生活に生きる書く力を育てるために

生活に生きる書く力を身につけるために、本稿では次の2つを重視する。

2. 2. 1. 子どもの思いを大切にする

生活に生きる書く力を育てるには、子どもの思いをしっかりと分かっていなくてはならない。時には練習も必要だが、本稿は子どもが書きたいと思うような単元を提案していく。子どもが書きたくなる場を設定することで、子どもは、書き方や書く内容を工夫して書くことができ、思考力・認識力・判断力が身につく。また子どもが書きたいと思う単元にすることで、子どもの書く意欲・習慣も身につく。

2. 2. 2. 教師の願いを大切にする

子どもの思いだけを大切にしている、その活動で書く力が身につかなくては学習にならない。教師の、こんな書く力を身につけてほしいという願いを単元に組み込んでいく。具体的に言えば指導事項がこれに当たる。指導事項が子どもに身につくよう、単元の中に組み込んでいく。指導事項だけではなく、教師の担任としての思いなど、学級経営的なことも、含まれる場合もある。

(附属小金井小 細川太輔)

3. 検証授業

以上のような課題をふまえ、検証授業を11月14日に行った。

3. 1. 検証授業の構想

- ・単元名 お世話になった方にお礼の手紙を書こう
—中学生として内容と形式のバランスのとれた手紙のありかたを考える—
- ・対 象 東京学芸大学附属小金井中学校 第1学年A組40名
- ・授業者 石井健介

3. 2. 単元に対する考え方

中学校学習指導要領の第2学年「書くこと」には言語活動例として「ウ 社会生活に必要な手紙を書くこと。」が掲げられ、次のように解説されている。

手紙の種類としては、例えば、近況を伝える手紙、何かを依頼する手紙、お礼の気持ちを伝える手紙などがある。このような「社会生活に必要な手紙」には、具体的な相手意識や目的意識が必要である。

手紙を書く際には、伝える相手の立場や気持ちに配慮するとともに、伝えたい内容の中心を明確にし、言葉を選び、気持ちを込めて書くことが大切である。手紙を書く相手を具体的に定め、郵便等を通じて実際に手紙のやり取りを行わせることも効果的である。その際、書写の指導との関連を図ること、また、手紙の形式を覚えさせるだけでなく、形式のもつ意味について考えさせることも大切である。

(学習指導要領解説より。下線は引用者。)

中学生にとって実際に「社会生活に必要な手紙」を書く機会は非常に少ない。日常の学校生活においては、友人や他学年の生徒にしても、教師や保護者にしても、手紙という形で依頼事項や感謝の気持ちを伝えるのは自然とはいえない。小学校段階では、そのような相手に対して「手紙を書く」という設定でも学習活動が成り立つ場合があるだろうが、中学校ではかなり難しい。

そこで、今回は実際に「手紙を書く相手を具体的に定め、郵便等を通じて実際に手紙のやり取りを行わせること」を体験させることにした。具体的には、勤務校の1年次11月に行われる、社会科学習を中心とする修学旅行で、世話になった訪問先や宿泊先等に礼状を書くという活動である。

本単元の学習においては、次の点を重視した。

第一に、小学校における学習活動と連携を図ること。小学校学習指導要領（国語）において「手紙」に関わる言語活動例には、次のようなものがある。

【第1学年及び第2学年】 オ 伝えたいことを簡単な手紙に書くこと。

【第3学年及び第4学年】 エ 目的に合わせて依頼状、案内状、礼状などの手紙を書くこと。

附属小金井小・中学校で使用している教科書（ともに教育出版「ひろがることば」と「伝え合う言葉」）に提示された指導内容及び学習活動をふまえ、小・中の連携を図り、発達段階に合わせたステップを設定することを目指した。

第二に重視した点は、他領域と関連を持たせること。「手紙を書くこと」は、中学校において次のような言語事項と関連を持っている。手紙を書く意義、内容と形式を備えた手紙のあり方等について、具体的に考える手がかりとして活用した。（「課題例」は教育出版『伝え合う言葉』による。）

・「話し言葉と書き言葉」（2年）

（課題例）修学旅行終了後、親切にいただいた旅館の従業員のかたへ、みんなの感謝の気持ちを伝えたい。この場合、電話（話し言葉）と手紙（書き言葉）のどちらを使ったほうがよいだろうか。

・「敬語（知識・理解）」（2年）、「敬語（社会の中での活用）」（3年）

（課題例）国語の自由研究のテーマに「方言」を選んだ田中さんは、転校生の大沢さんの紹介で、会津地方の方言調査をすることにしました。大沢さんが通っていた、会津の中学校の校長先生宛てに、調査依頼の手紙を書こうと思いますが、どのように表現すれば快く引き受けてもらえるでしょうか。（以下略）

第三に重視した点は、学校行事等と連携すること。本校では各学年にひとつずつ「修学旅行」を設定している。（位置付けは総合。）事後指導の一環として「お世話になった方へのお礼の手紙」を必須の活動にしているが、これまでは、国語科教員が若干の趣旨説明を行い、書き方見本を提示した後は、学年教員に一任していた。今回の実践では、取材・構成・記述・推敲・交流といった一連の学習活動を国語科主体で担当することにした。

「お礼の手紙」の対象と人数分担は、次のとおりである。（40名の学級の例。）

・講師 4名	・醤油工場 2名	・看護師 2名	・鹿島湾港湾事務所 2名
・バス運転手 4名	・住友金属 2名	・バスガイド 4名	・JA 波崎 2名
・ホテル 2名	・ピーマン農家 5名	・加曽利貝塚管理事務所 2名	・青果販部役員 5名
・伊能忠敬記念館事務所 2名	・魚市場管理事務所 2名	計40名	

これらの対象の中には、企業の営業活動の一環であったり、日常的な業務に含まれたりするものもあるが、生徒がそれぞれの対象に「職業をもって働く人々」の姿を見いだし、「客」や「消費者」とは異なる視点を獲得していけるように指導した。そのような指導をほとんど必要としないのが、農業調査で訪れるピーマン農家の方々である。農家の方々が全くのボランティアとして中学生の学習につきあい、稚拙な質問にも丁寧に答えてくれることに対して、生徒は強い感謝の念を抱く。旅行中のこのような感情の高まりや体験の蓄積が「0次の学習」として機能していることは言うまでもない。

3. 3. 単元の目標

- お世話になった方に、気持ちや事柄がきちんと伝わるようなお礼の手紙を書く。
- 中学生として内容と形式のバランスのとれた手紙のありかたを考える。

3. 4. 単元の評価規準

国語への関心 ・意欲・態度	書 く 能 力	言語についての知識・理解・技能
・形式（型）のもつ積極的な意義を理解し、日常生活に生かそうとしている。 ・手紙の形式を整えて、お世話になった相手への感謝の気持ちを表す手紙を書こうとしている。	・お礼の手紙を書くために、相手に伝えたいことを具体的に挙げている。（ア） ・相手に伝えたいお礼の内容の中心を明確にし、手紙の形式に沿って構成を考えている。（イ） ・相手に対する感謝の気持ちが伝わるように、印象に残る出来事やその時の思いを具体的に書いている。（ウ） ・相手への配慮、言葉の使い方、手紙の形式などに注意して、感謝の気持ちが相手に伝わりやすい手紙にしている。（エ） ・書いた手紙を互いに読み合い、書き手の気持ちの表現、言葉の使い方などについて意見を述べたり、助言し合ったりしている。（オ）	・相手に対する自分の気持ちが適切に伝わるように、書き言葉における敬語の使い方に注意して文章を書いている。（イ（ア）） ・目上の人に対する手紙を書くために、書式を整えて文章を書いている。（イ（オ）） ・学年別漢字配当表に示されている漢字を適切に使って手紙を書いている。（ウ（イ））

国立教育政策研究所「評価基準作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 中学校 国語」平成23年を基にした。

3. 5. 研究の視点

3. 5. 1. 視点1 小学校の学習との連携と発展

- 手紙の「形式」と「内容」の関わりについて、小学校での知識理解をふまえた概念形成を目指す。
形式と内容の二項対立的なとらえ方を脱し、「形式に支えられた内容」という発展的な概念形成をねらう。
- 自他の「手紙体験」を共有し、学習したことや体験したことの相互理解を図る。
小学校入学以来の「手紙体験」をアンケート形式で回答し、その集計結果を概観する場を設ける。

3. 5. 2. 視点2 相互交流による学習の深まり

- 学び合い学習として、相互交流の場を設ける。
下書きを相互に読み合い批評し合う場を設けることにより、内容面及び形式面の一層の向上を図る。

3. 5. 3. 言語事項の学習との連携

- 国語科他領域と関連させた学習指導を行う。
必要に応じて「話し言葉と書き言葉」「敬語」、硬筆書写の学習等と関連を図り、表現のしかたを工夫させる。

3. 6. 学習指導計画（全4時間＋3日）

第0次（動機付け）

- ①自分たちの「手紙体験」を振り返る。（1時間）

第1次（取材・構想・記述）

- ②自分が担当することになった相手について、手紙を書くための材料を集める。（旅行中11/6～8）
- ③「お礼の手紙」の下書きを書く。（1時間）※構成や記述の指導は省く。各自が用意した便せんを使う。

第2次（推敲・交流）

- ④「お礼の手紙」の内容と形式について理解し、相互批評の後、下書きを修正加筆する。（1時間 本時）
- ⑤修正加筆された下書きをもとに、清書する。（1時間）

3. 7. 本時の展開（本時 3 / 4 時間）

3. 7. 1. 本時の目標

- ・手紙における「形式」と「内容」の関係について考え、「形式（＝型）」の存在意義を理解する。
- ・下書きとして書いた文章を相互批評し、「形式の中に豊かな内容を持つ」ものになるよう推敲する。

3. 7. 2. 本時の展開

展開	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	1 旅行前に実施した調査の結果を概観し、学習へ向かう姿勢を作る。 2 統計的なデータから読み取れるものについて考える。	・学級全体の傾向を見ると同時に、その中で自分がどのような状況にあるのかを理解させる。ただし、経験や学習の少なさはマイナス要素としない。
展開 1	3 手紙における「形式」と「内容」の関係について、考えを述べ合う。 4 「内容は豊かだが形式を全く配慮していない手紙」と「形式は整っているが内容が空疎な手紙」の二つを比較し、理想の手紙のあり方（手紙における形式の意義をふくむ）を考える。→備考参照 5 形式や型を大切にしているものが他にもないか、日常生活の中で探す。	・抽象的な議論にならないよう、頭語や結語、時候の挨拶などが中学生の手紙に必要な否か等具体例をあげて議論させる。 ・形式への否定的見解が多く出るとよい。 ・手紙例は教師の創作による極端なものを提示する。 ・国語便覧等の具体的な解説や例も参考にする。 ・形式と内容が二項対立ではないことに気づかせたい。 ・内容が形式に支えられることに気づかせたい。 ・卒業式等の儀式的行事や葬送の儀式などを例示し、型がなかったらどうなるかを想像させる。
展開 2	6 下書きした手紙を互いに読み合い、意見交換をする。 7 意見交換の結果をもとに、下書きに修正加筆をする。	・「中学生として背伸びしすぎない、しかし社会的な常識に則って書かれ、読み手に気持ちが伝わる手紙であるか」を評価の観点とする。 ・もらった意見をすべて取り入れさせる必要はない。
まとめ	8 清書に続く今後の段取りについて知る。	・発送までの手順を伝える。 ・必要があれば、先輩の手紙を例として示す。

3. 7. 3. 本時の評価

- ・手紙の形式が内容を支えるものであることを理解し、広く「型」一般に理解を広げることができたか。（発言・作品）
- ・相互批評において、適切な意見交換ができ、自己の手紙を形式、内容ともに高める推敲ができたか。（話し合い、作品）

【備考】「展開 1 の 4」で提示したのは次頁の 2 例である。便箋の選択や使い方にも相違があるが、ここではテキスト部分のみを掲げる。

《例1 次郎くんの手紙》

ピーマン農家の山田さんへ

ピーマンを育てるのって、ほんとうに大変なんですね。ビニールハウスの中はとっても暑いのに、おじさんはがんばって働いていたので、ぼくはほんとうにえらいと思いました。試食しなさいと言われたので食べてみたら、けっこうあまくて、ピーマンがきらいなぼくでもこれなら大丈夫だと思いました。

害虫をやっつけるために外国から天敵の虫を買ってくるという話もびっくりしました。でもとっても高いんですね。もっといい方法があればなあ。虫がとても小さくて、持っていったルーペではよく見えなかったのは残念でしたが、そんな小さな虫を扱う苦勞がよくわかりました。

それから、山田さんは「長男が農家のあとつぎをきらって、サラリーマンになってしまった」と言っていたのが、とてもかわいそうでした。こんなに苦勞して育ててくれたのに。でも、こどもにもそれぞれの人生を選ぶ権利があるからと言っていた山田さんはとてもりっぱでした。

それから、ぼくたちは「畑はどれくらいの面積？」とか、「年間収入はどのくらい？」とか、「ビニールハウスはいくらくらい？」とか、失礼な質問をたくさんしたのに、全部わかりやすく答えてくださったことが、とてもうれしかったです。

平成二十四年十一月十二日

小金井太郎より

それから、一緒に話をしてくれた奥様にもよろしく。

《例文2 太郎くんの手紙》

拝啓

晩秋の候、皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。本校も生徒一同、帰校後は勉強に励んでおります。

さて、先日は修学旅行の農業調査にご協力を賜り、誠にありがとうございました。貴重なお話をうかがい、ビニールハウスで丹精されたピーマンを拝見することができ、訪問させていただいた生徒一同、大変に感動するとともに、農業のご苦勞を実感いたしました。今後は、常に作物を作ってくださる方々のご苦勞を思い、すべての食材を大切に扱おうと気持ちを新たにいたしました。

お忙しい中、このような貴重な体験をさせていただいたことに、心より感謝申し上げます。

末筆ではございますが、向寒のみぎり、どうぞ自愛下さいませよう。

敬具

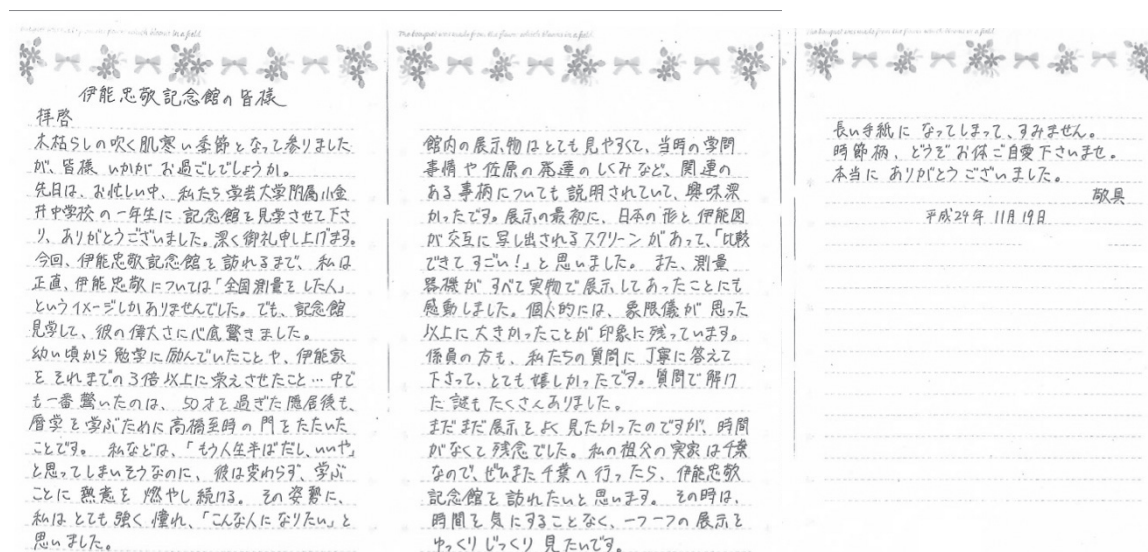
平成二十四年十一月十二日

小金井 太郎

山田 和雄様

3. 8. 生徒の作品と感想

①清書後の手紙（伊能忠敬記念館の方宛て）



②手紙に関するアンケート回答例（①と同じ生徒）

国語科調査

「手紙」に関する調査

1 あなたがこれまでで最も手紙を書いた経験に出したことがある「相手」と「時期」を記入してください。
【例】前の年の担任の先生へ／近況報告を／小学校3年のとき

・ 5・6年の担任の先生へ／感謝・近況報告を／最近
・ 5・6年の友達へ／学園祭招待のお礼を／最近
・ ある学校の先生へ／楽譜送付の依頼を／④6年で
etc...

2 手紙を書く（出す）とき、大切に思う言葉を3つあげてください。
【例】相手の名前を間違えないこと。← 慎重
① 何事も心にためて書くこと。（自然と空も丁寧になる気がする）
② 敬語に気を付けること。（目上の人に出す時）（言葉使い）
③ センスのいい便紙を使うこと
④ 1枚だけじゃなく、1枚白紙をつけた。

3 手紙を書く（出す）ことについて、学校で習ったことがあれば記入してください。
何年後かの自分へ手紙を書く際、
「拝啓、様子の悪い季節になりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。」
と書き出す。 ← 季節は関係ない。お歳ごし...
「（本題）...」でいい。お礼に気づいたら、敬具。
前略、不遜、草々。と後略とあるけれど、
と書いていい。 (A) 敬 氏名 ()

③本単元を終えての学習感想

- 手紙の形式は文字どおり「形式的」なもので、大人の世界の約束事だと思っていました。形式に意味があるとはあまり思っていなかったのですが、今回の授業を受けて、「形式があるから表現できる」とか「形式が決まっても中身はみんな違う」ということが何となくわかった気がします。
- 中学生として背伸びをしない、だけど幼稚ではないという手紙がイメージできなかったのですが、今度の勉強で少し具体的に考えられるようになったと思います。

（附属小金井中 石井 健介）

4. 今年度の成果と課題 石井実践に関して

4. 1. 成果

- 中学生であっても、0 次と実の場における活用を導入することで、生徒の意欲を高め、主体的な学習が展開できた。

4. 2. 課題

- 「展開 1 の 4」の二種の手紙の読み比べに予想を上回る反応があったため、「展開 2」以降に進むことができなかった。次時に実施することにしたが、例示した 2 通の手紙の例が両極端なもので「突っ込みどころ満載」だったためである。「形式」だけでも「内容」だけでも社会生活にふさわしい手紙の体をなしているとは言えないということが理解できる程度の、焦点化された例に改めるという方法もあった。
- 協議会では「形式に支えられた内容」という概念形成と、相手に感謝の気持ちがきちんと伝わる手紙を書き上げるもののいずれに重点が置かれるべきなのかという点が大きな話題になった。授業者は両者を対等なバランスで考えていたのだが、最後まで意見が分かれたままであった。「実の場」を今回の手紙作成の範囲で考えるなら、後者が重視されるであろうし、将来にわたる「手紙を書く場」全体を視野に入れるならば、前者が重視される。今回の授業でどちらの立場をとるべきかについては結論が出せず、課題として残っている。

(東京学芸大学 大熊徹)

